

「田中関田町遺跡からみつかった近代の遺物について

―出土文字資料と文献史料にもとづく考察を中心に―

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センターの京大文化遺産調査活用部門に属する^{ささかわなおき}笹川尚紀と申します。わたくしの話ではありますが、^{たなかせきでんちよういせき}田中関田町遺跡からみつかった近代の遺物について、主として出土文字資料と文献史料を基にして、考察を加えていく所存であります。

田中関田町遺跡といっても、一体どこにあるのか、おわかりにならないのではないかと思います。これについては、リーフレットの最後の頁、8頁をみてください。8頁の左上の方に、455として赤く示されているのですが、その455地点が田中関田町遺跡にあたります。ただし、より正確にいうと、455地点は、田中関田町遺跡のなかに含まれます。つまりは、田中関田町遺跡は、もう少し広く設定してあって、455地点は、その一部をなしているということでもあります。もちろん、田中関田町遺跡という名称は、地名に由来するものであります。

さて、田中関田町遺跡、455地点であります。京阪鴨東線・叡山電鉄の^{おとう}出町柳^{でまちやなぎ}駅の前から^{ひやくまんべん}百万遍の交差点へといたる道、その道に沿った南側に位置しています。そこには、昭和34年（1959）から、京都大学の女子寮が所在していたのですが、建物の老朽化が進んで、それゆえに、建て替えが計画されました。その建て替えに伴って、平成29年の10月半ばから翌平成30年の1月末まで、3ヶ月強の間、発掘調査が行われたのですが、わたくしとその発掘調査を担当しました。455地点の発掘調査の成果に関しては、2020年2月28日に発行された『京都大学構内遺跡調査研究年報 2018年度』のなかの第I部第2章においてまとめられていますので、ご興味ございましたら目を通していただければと思います。なお、それについては、京都大学学術情報リポジトリ「K U R E N A I」から、閲覧・ダウンロード・印刷が可能となっておりますので、そちらを利用していただくのが便利であるといえます。ちなみに、現在は、新しく建て直された京都大学の女子寮が、455地点のところに所在しています。

話を455地点に戻すと、その発掘調査に関しては、リーフレットの6頁、図17に目を向けてください。図17は、455地点の平面図であるのですが、太線で囲ってあるところ、その内側が発掘調査をしたところにあたります。また、一点鎖線で表しているのですが、その内側が京都大学の女子寮の敷地であります。要するに、女子寮の敷地内の大部分を発掘調査したことになるのですが、もとより、発掘調査したところは、新しく建物が設けられる場所に相当します。

なお、細かな事柄であるのですが、太線内を発掘調査する場合、掘りあげた土の置き場所にとっても困ることになります。なぜなら、女子寮の敷地は、一点鎖線内であって、太線内を全体的に掘りさげていくと、それによって生じる不要となる土の置き場所が確保しえないからであります。それでは、こうした問題を解消するために、どのような措置をとったのかというと、図17において赤線を引いてあるのですが、まずは、その赤線の南側を発掘調査して、その際に出てきた土を赤線の北側に積みあげます。つづいて、赤線の南側の発掘調査が終了した後、その北側に置いてあった土を赤線の南側に戻します。そして、その後、赤線の北側を発掘調査して、その折に生じた土は、赤線の南側に積みあげます。つ

まりは、掘りあげた土の置き場所を設けるために、赤線の南側・北側というように、2回に分けて発掘調査を実施したわけであります。そうであるが故に、赤線の南側を南区、北側を北区と呼ぶことにしました。本来ならば、全面的に発掘調査すべきなのですが、そのような事情で、南区・北区という順番で、それを行ったわけであります。なお、これからは、説明の便宜上、455地点については、北区・南区という名称を用いていきますので、この点、ご了解いただきたいと思います。

さて、わたくしの話のテーマである近代の遺物でありますが、レジュメに記したように、北区の大攪乱だいかくらん、ならびに南区の表土・攪乱はいかつしよくど、灰褐色土から数多く出土しています。それらのうち、まずは、攪乱に関して説明しておく、近代以降に掘られた箇所をそう呼んでいます。わたくしが属する部門が京都大学構内で発掘調査する場合、近代以降の地層や遺構しんりよくなどについては、重機で、すなわち機械力で掘りあげます。その後、近世の地層から、人力で徐々に掘り上げていくことになります。もとより、近代の地層・近代の遺構に関しては、京都大学構内でありますから、人力で掘削するのがベストであるのですが、予算や期間などの関係上、そうはいきません。つづいて、灰褐色土に移りますが、レジュメには、「近世後期から近代の遺物包含層」と書きました。だいたい19世紀から20世紀半ばごろまでの地層であると理解してください。灰褐色土という呼称は、わたくしが名づけたものなのですが、それは、土の色に基づきます。発掘調査をスムーズに進めるために、それぞれの地層の色や質などをふまえたうえで、おのおのに対し名称を与えていくことになります。

以上、攪乱と灰褐色土について簡単に触れてきたのですが、わたくしの話のなかで中心となるのが、北区の大攪乱であります。大攪乱に関しては、そこが大きな攪乱であったが故に、そう名づけたのですが、そこから大量の近代の遺物、陶磁器や瓦・ガラス製品などがみつかっています。しかしながら、それは、攪乱にあたりますので、先に述べたように、重機で、機械力で掘りあげています。ただし、たくさんの遺物をみて、それらが現代のものではなく、近代のものであるとわかりましたので、発掘調査に従事している作業員の方々に、できるだけ拾っていただくようお願いしました。したがって、近代の遺物をすべてとりあげたわけではないのですが、かなりの量を持ち帰ることができたのではないかと考えています。つまるところ、大攪乱は、出土遺物に基づく、近代に掘られたものであり、数多あまたの陶磁器などが廃棄された後に、埋め戻されるにいたったと考えられます。

かくして、前置きが長くなってしまったのですが、わたくしの話は、主として北区の大攪乱からみつかった近代の遺物について、とかく検討を行っていくものであります。具体的には、その近代の遺物の大半の性格をめぐって、卑見を開陳していく所存であります。ここで、結論を述べてしまうと、リーフレットの6頁の図17に目をやっていたいただきたいのですが、図17の左端に清風荘と書き込んであります。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、清風荘せいふうそうというのは、立憲政友会の総裁や内閣総理大臣を務めた、かつ最後の元老として著名な西園寺公望さいおん じきんもちの別宅にあたります。そうした清風荘の前身は、すぐ後で触れるように、清風館というのですが、大攪乱から出土した近代の遺物の大部分は、この清風館に係わるものであると推測しています。それでは、どうしてそのような見方が提示できるのか、これからは、そうした点に関して、やや詳しく論じていくことにいたします。

1. 清風荘をめぐって

それでは、1の「清風荘をめぐって」のところに入ります。先に、清風荘については、西園寺公望の別宅であると述べたのですが、以後のわたくしの話の都合上、まずは、西園寺公望の血縁に関しておさえておきたいと思います。

これについては、レジュメの【図1】をみていただきたいのですが、西園寺公望の祖父は徳大寺実堅、父は徳大寺公純であります。リーフレットの6頁に記しておいたのですが、徳大寺家というのは、摂関家に次ぐ家柄である清華家の一つにあたります。要するに、徳大寺家は、名門の公家に該当します。そのような徳大寺家の公純の子として、【図1】では、3人の名前を掲げてあります。実際のところ、徳大寺公純の子は、それよりも多いのですが、話が複雑になってわかりにくくなってしまうのを防ぐために、わたくしの話と深く関係する3名の人物のみをあげてあります。

まずは、徳大寺実則であります。実則は、公純の長男であります。その姓が示しているように、徳大寺家を継いだ人物にあたります。実則は、侍従長として、明治天皇の側近くに仕えたことが知られています。つづいて、西園寺公望に関しては、前にその経歴を簡単に触れたのですが、徳大寺公純の次男にあたります。公望は、幕末に幼くして西園寺家の養子となり、僅か4歳で西園寺家を継いでいます。最後に、住友吉左衛門友純（春翠）であります。この人物は、徳大寺公純の五男にあたります。友純は、明治25年（1892）、29歳の時に、住友家の養子となります。いうまでもなく、住友家は、三井・三菱と並ぶ三大財閥の一つであります。そして、翌明治26年に、30歳で住友15代の家長となって、吉左衛門を襲名しています。ちなみに、友純は、その際に用いられるようになった諱、春翠は、雅号にあたるのですが、これからは、春翠と呼んでいきますので、この点、ご承知ください。

かくして、徳大寺実則・西園寺公望・住友春翠は、姓は違えど、いずれも徳大寺家の出身であり、かつ公純の子である、という点を確認してきました。こうした事柄については、記憶に留めておいていただきたいと思います。ただし、いささか細かい話をすると、実則と公望・春翠の母は異なっています。つまりは、実則と公望・春翠は異母兄弟、公望・春翠は同母兄弟ということになります。

それでは、このような点をふまえたうえで、清風館に関してとりあげていきたいと思えます。レジュメに目を向けていただきたいのですが、清風館は、江戸時代後期に設けられた徳大寺家の別邸にあたります。【図1】をみていただきたいのですが、はじめのところに徳大寺実堅をあげてあり、この人物が造営したものであります。その年については、いくつかの書籍を繙くと、文政12年（1829）ないしは天保3年（1832）とあって、定まってはいるのですが、どちらにしろ、江戸時代後期に建てられたのは間違いありません。なお、徳大寺家の本邸は、烏丸今出川北東の同志社大学今出川キャンパス、そのなかでも図書館のところに位置していました。

ちなみに、徳大寺実堅が田中村に清風館を設けたことに関しては、そのころ同村に摂関家の一つである鷹司家の別邸が所在していたのをみすごすことができないと推察しています。実際のところ、実堅は、鷹司輔平の子であって、徳大寺公迪の養子となっています。その異母の兄に、関白および准三宮に任じられた、年齢の離れた鷹司政熙がいたのですが、この人物が田中村に別荘を構えていたことが知られます。そういう点が一因となって、清

風館がそこに築かれるにいたったのではないかと考えています。

さて、清風館であります。徳大寺実堅の後、その子である公純（鷹司政熙の曾孫で、実堅の養子となる）にうけ継がれます。公純は、明治時代になっても東京に移らず、清風館で生活し、同16年（1883）11月に他界しています。なお、【図1】に掲げた、公純の3人の実子のうち、春翠は、父が死去した明治16年11月まで、家族とともに清風館に住み続けていました。しかしながら、それからあまり時を置かずして、残された家族は、東京に転居することになります。ここに清風館は、京都における徳大寺家の別邸となるにおよびました。

そこで、レジュメをみていただきたいのですが、明治40年（1907）8月に、清風館は、徳大寺実則から住友春翠に譲られています。これにより、清風館は、徳大寺家の所有から住友家のそれへと変わることになります。そしてまた、徳大寺家から住友家への譲渡に伴って、西園寺公望の京都における控邸にあてられることが決定します。このような事柄の背景に関しては、説明する必要はないと思われませんが、それら3名が徳大寺公純の子であった、という点があげられます。つまり、清風館は、住友家が所有・管理する、西園寺公望の別邸になったわけでありす。

それでは、その後、清風館が一体どうなったのかであります。こうした点については、【史料1】に着目します。【史料1】は、『住友春翠』という春翠の詳細な伝記の一部であります。そのなかには、誤りも含まれているのですが、春翠の生涯を知るための貴重な史料であるといえます。【史料1】を読みあげると、「公望は自らの好に依り、又旧清風館の面影を残すことに意を配つて、新館造営と庭園の改造を計り、住友家の手に依つて大正二年に之を竣功した。造庭は小川治兵衛、建築は八木甚兵衛が、春翠の命に依り、公望の意を受けて当つた。公望は旧名を保つて清風荘と名附けた」とあります。すなわち、この記述によると、西園寺公望は、清風館の建物を解体・撤去するなどして新しい建物を造営したこと、そうした新館に対して清風荘という名を与えたことなどがわかります。

また、【史料2】に目をやっていただきたいのですが、【史料2】は、実業家で、かつ茶道の研究者であった高橋箒庵が著した『東都茶会記』の一部であります。高橋箒庵は、大正5年（1916）11月22日に、清風荘を訪れ、西園寺公望と会話しています。【史料2】によると、「侯」、すなわち公望は、「徐に語り出で、是れは旧徳大寺家の下屋敷にて、自分の祖父が経営せし者なれども、旧建物のいたく破損しければ、四五年前遂に之を取払ひて」云々と語ったとあります。これにより、清風館の建物が「いたく破損し」ていたが故に、公望は、それを「取払」った、ということがおさえられます。

なお、【史料2】の下のところをみていただきたいのですが、岸泰子さんと杉田そらんさんのご研究によると、清風荘の主屋に関しては、明治44年（1911）7月に、敷地に縄が張られるなどし、翌8月から工事が本格化して以降、大正元年（1912）の末には、ほぼ完成するにいたった、と述べられています。お二方は、京都市左京区鹿ヶ谷の住友史料館に所蔵されている、いわゆる「清風荘史料」の丹念な分析の結果、そのように指摘されています。「清風荘史料」のうちの1点は、後でとりあげますが、前に触れたように、清風荘は、住友家の所有でありましたので、それに係わる多くの文書・絵図などが住友史料館に残されたわけでありす。それはともかくとして、清風荘の建物の新築などは、明治44年の夏ごろからはじまったこと、くわえて、清風館の建物の解体・撤去などは、同年の夏ご

るよりも前に終わっていたことがうかがわれます。とりわけ、後者については、わたくしの考察にとって非常に重要な点となりますので、ぜひとも覚えておいていただきたいと思ひます。

なお、詳細は割愛しますが、大正2年(1913)以降、西園寺公望は、しばしば清風荘に滞在しています。その最後となるのが、昭和7年(1932)の秋であるのですが、その折のことについては、〔参考文献〕に掲げた、伊藤之雄ゆきおさんのご著書に詳しく記されておりますので、ご関心のある方がいらっしゃれば、それに目を通していただければと思ひます。

ちなみに、若干付言しておく、公望の死後、清風荘は、京都帝国大学の総長であった羽田はねだ とおる亨氏の働きかけにより、昭和19年(1944)3月に、住友家から同大学に寄贈されるにいたっています。その日記によると、昭和20年5月1日に、子息である卓氏の結婚式の祝宴が清風荘で催され、それに対して、「清風荘ヲ構へ給ヒシ陶庵公(西園寺公望のこと一笹川注)モ、ソノ亡キ後カ、ル事ニ荘ガ使用サレヨウトハ思シ召サバリシナルベク、余モ亦カ、ル事ニ此ノ荘ヲ用^{したた}得ベシナド夢ニモ思ハザリシヲ、世ノ変転ノ測リ知ル可ラザルコトスベテ此ノ類ナリ」と認められています。

さて、1の最後として、明治時代末ごろ以降の455地点の所有者に関して、確認しておきたいと思ひます。これについては、レジユメの【史料3】に目をやっていたのですが、【史料3】は、『京都地籍図』第参編 接続町村之部と『京都市及接続町村地籍図附録』第参編 接続町村之部であります。それらは、もとよりセットであつて、そこに記してあるように、大正元年(1912)10月31日に発行されたものであります。

その1行目には、「愛宕郡おたぎ／田中村大字田中ノ内(ママ)／字 開田」とあるのですが、これは、『京都地籍図』における表記であります。「愛宕郡田中村」とあるように、田中の地域は、この段階では、京都市に編入されてはおりません。くわえて、「開田」については、それは間違いであつて、正しくは「関田」であります。そのなかに、地番「四ノ三」が描かれているのですが、この地番「四ノ三」と、455地点の北区の大攪乱から南区にかけてのところが合致すると考えられます。もう一度述べておくと、リーフレットの6頁の図17をみていただきたいのですが、北区の大攪乱から南区にかけては、地番「四ノ三」に相当すると目されます。

【史料3】に戻つて、2行目と3行目、それらは、『京都市及接続町村地籍図附録』の記載であるのですが、それによると、地番「四ノ三」は、地目が「畑」であつて、その持ち主は「住友吉左衛門しゆんすい」であつたことがわかります。つまりは、地番「四ノ三」は、大正元年のころには、住友春翠の所有地でありました。委細は省略しますが、住友家は、清風館を譲られた明治40年(1907)8月からさほど時を経ずして、この土地を入手するにいたつたと考えられます。結論を述べると、明治時代の末以降、地番「四ノ三」、いい換へると、北区の大攪乱から南区にかけては、住友家が所有していたと理解されます。

それでは、残る北区の東半はどうだったのかということ、これに関しては、【史料4】をとりあげなければなりません。【史料4】は、石碑であつて、それは、発掘調査の折、北区の東の壁際に抜かれて置かれていました。高さが70cmくらいの石碑であるのですが、もともとその辺りに建てられていて、女子寮が完成した暁には、再び設置するという話を耳にしております。よつて、現在は、女子寮の敷地内に建っているはずで、その表面には、「寄贈 澤村志づ／土地一九七平方米」、裏面には、「平成五年十二月」とあります。要

するに、澤村志づさんによって、北区東半の土地が、平成5年（1993）12月に、京都大学に寄贈されたことが判明します。リーフレットの6頁の図17の北区と書かれている辺り、すなわち北区東半は、『京都地籍図』第参編 接続町村之部と『京都市及接続町村地籍図附録』第参編 接続町村之部などに基づくと、長らく澤村さんの土地であり、住友家のものではなかったことが確かめられます。

2. 「京都府立療病院」と「京陶」

それでは、2の「京都府立療病院」と「京陶」のところに移ります。鉤括弧で京都府立療病院と京陶を示したのは、出土した遺物にそれらがみえるからであります。

まずは、「京都府立療病院」をとりあげると、リーフレットの6頁の図17に目をやっていたいただきたいのですが、北区の大攪乱から、「京都府立療病院」とある円筒形の磁器が10点みつかっています。そのうちの1点が、リーフレットの7頁の写真19にあたります。ちなみに、展示では、2点だけ並べておきました。「京都府立療病院」は、京都府立医科大学附属病院の前身に相当します。ご承知のことと思いますが、京都府立医科大学附属病院は、鴨川の西、河原町今出川を下がったところに位置しています。これから説明するように、戦後になって京都府立医科大学附属病院という名称に定まるまでには、いくつかの変遷がありました。もっとも、そういうことは、京都府立医科大学もまた同様であったのですが、非常に複雑な話となってしまいますので、その呼称の推移に関しては、省略させていただきます。

そこで、レジュメをみていただきたいのですが、明治15年（1882）11月に、京都療病院から京都府立療病院に改名しています。これより約3年前、同12年9月に、京都療病院は、現在の京都府立医科大学附属病院の地に移ってきています。つぎに、明治36年（1903）6月のことになるのですが、京都府立療病院は、京都府立医学専門学校附属療病院へと改称しています。そして、その下、もう少しだけ確認しておくと、大正13年（1924）10月には、京都府立医学専門学校附属療病院から京都府立医科大学附属医院に改名しています。

以上の点をふまえると、京都府立療病院という呼称は、明治15年（1882）11月から明治36年（1903）6月までの間のものであったことがおさえられます。したがって、「京都府立療病院」とある10点の円筒形の磁器については、この期間に^{こしら}えられたものであった、ということが推察されます。

つづいて、「京陶」に移りますが、同じく北区の大攪乱からの出土遺物のなかに、「京陶」と書かれているものが含まれていました。具体的にいうと、2点の磁器皿の底部外面に「京陶」とみえるのですが、そのうちの1点が、リーフレットの7頁の写真21にあたります。なお、展示においては、2点とも並べてありますので、ご覧になってください。この「京陶」に関しては、わたくしは、京都陶器会社、京都陶器株式会社を略したものである可能性が高いと判断しています。

そこで、レジュメに目を向けていただきたいのですが、京都陶器会社、京都陶器株式会社というのは、明治20年（1887）5月に創立された陶磁器製造会社であって、その工場は紀伊郡深草村^{ふくいな}福稲に設置されています。なお、念のため確認しておくと、京都陶器会社と京都陶器株式会社は、同じ会社であります。細かい話になるのですが、明治26年7月に施行された会社法に基づいて、社名に「株式会社」を付すことが義務づけられています。す

なわち、会社法の施行を契機にして、京都陶器株式会社と称するようになっただけであって、結局のところ、京都陶器会社と京都陶器株式会社は、同一のものであります。よって、これからは、京都陶器会社を用いていきたいと思えます。

ちなみに、リーフレットの5頁の写真13をみていただきたいのですが、「京都陶器株式会社」とあります。それが記されているのは、磁器製の漏斗^{ろうと}であって、今回の展示品のなかに含まれているのですが、病院東構内の366地点から出土しています。要するに、それは、京都陶器株式会社の製品であって、京都帝国大学医科大学附属医院、ならびに京都帝国大学医学部附属医院において使われていたことが考えられます。

このような京都陶器会社については、まずは、【史料5】に目をやっていたいただきたいのですが、【史料5】は、「京都陶器会社株金分担見込書」であります。省いた部分が多いのですが、この史料から、当初の資本金が20万円であったこと、田中源太郎・濱岡光哲^{こうてつ}・内貴甚三郎^{ないき じんざぶろう}といった発起人21名の姓名が知られます。しかしながら、リーフレットに記したように、京都陶器会社は、機械生産により国外への輸出を行ったものの、さまざまな原因から経営不振に陥ります。

その結果に関しては、【史料6】をみていただきたいのですが、【史料6】は、【史料5】に掲げた田中源太郎の伝記のなかに含まれている、丹羽圭介の談話の一部であります。丹羽圭介というのは、京都陶器会社の支配人を務めていた者であります。【史料6】によると、京都陶器会社は、明治25年（1892）に、解散するにいたったとあります。けれども、丹羽圭介は、「右と同時に私も会社を退いたが、その後暫く五車楼書店主の藤井孫六氏が社長として経営して見たが、これも長くは続かなかつた」と語っています。

注目したいのは、傍線部分の「五車楼書店主の藤井孫六氏」であるのですが、そこに「藤井孫六」とあるのは、間違いであると判断されます。というのは、その下をみていただきたいのですが、五車楼書店、すなわち「菱屋 五車楼」は、御幸町通御池下ル、わかりやすくいうと、現在の京都市役所の南東の辺りの地において、明治時代の末ごろまで12代続いた書肆であって、おのおのの主人は、藤井孫兵衛を名乗っていたからであります。そして、さらに敷衍すると、【史料5】に目をやっていたいただきたいのですが、太字で表したように、発起人の一人として藤井孫兵衛があげられていて、つまりは、設立当初から係わっていたことが確かめられます。【史料6】の記述をふまえると、この藤井孫兵衛が社長となって、明治25年以降、京都陶器会社の経営が行われたことがくみとれます。

このような京都陶器会社であります。その時期、内地向けの生産に転換するとともに、電気用の碍子^{がいし}などの製造にとり組みました。ところが、【史料6】で丹羽圭介が話しているように、「これも長くは続かなかつた」といえます。

つづく【史料7】をみていただきたいのですが、【史料7】は、明治36年（1903）3月25日付の『京都日出新聞』の記事であります。『京都日出新聞』は、現在の『京都新聞』の前身にあたります。【史料7】を読みあげると、「京都陶器会社の任意解散 同社は（明治34年）一昨年以来業務休止中なるが、斯ては益々欠損を重ねるを以て、之が恢復の為昨（明治35年）年末より事業開始の計画をなせしも、是亦意の如くならざれば、今回遂に任意解散することに決し、来月四日午後一時より同社内に於て臨時株主総会を開き精算人を定めたる上、財産の処分を為す由なるが、他に債権者もなきこととて、精算手続きの完了は速かなるべしと。而して資本金五万五千五百円の中約三万円の欠損あるが、未だ買受人等はなき由」とあり

ます。

この記事によると、京都陶器会社は、傍線を引いておいたのですが、明治36年4月4日に、任意解散するとあります。念のため、4月5日付の『京都日出新聞』をみてみたのですが、そのことは、書かれてはいませんでした。けれども、4月4日に解散したことは、まず誤りないのではないかと考えられます。この【史料7】のなかで、留意すべきは、1行目の「一昨年以来」、すなわち明治34年（1901）以来、「業務休止中」であるという点であって、その内容から、「業務休止中」の状態が解散するまで続いていたことがくみとれます。したがって、京都陶器会社の製品に関しては、明治33年以前に作られた公算が大きいと判断されます。

以上、「京陶」とみえる磁器皿2点をめぐって、やや詳しく検討を加えてきたのですが、「京陶」が京都陶器会社のことを指すと解して疑いないとすると、それらは、明治33年（1900）以前に拵えられた蓋然性が高いといえます。くわえて、その上限に関しては、藤井孫兵衛が社長となって経営が行われた段階、すなわち、明治20年代の後半に求められるのではないのでしょうか。要するに、「京陶」とみえる磁器皿2点については、京都陶器会社の製品であって、明治20年代後半から同33年までに作られた可能性が高いと考えます。

3. 大攪乱出土の近代遺物の性格

それでは、3の「大攪乱出土の近代遺物の性格」のところに移ります。ここでは、1と2における成果をふまえたうえで、大攪乱から出土した近代の遺物の性格について、私見を提示していきたいと思えます。

想起していただきたいのですが、1で述べたように、清風荘の前身である清風館、その清風館の建物の解体・撤去などは、明治44年（1911）の夏ごろよりも前に完了していたことが察せられます。そのうえで、清風荘の建物などが新築されるにおよびました。くわえて、北区の大攪乱から南区にかけては、明治時代の末以降、清風館・清風荘と同様に、長らく住友家が所有していたと考えられます。

そして、2においては、「京都府立療病院」とみえる円筒形の磁器は、明治15年（1882）11月から明治36年（1903）6月までの間に作られたこと、「京陶」と書かれた磁器皿は、明治20年代後半から明治33年（1900）までの間に作られたことをくみとりました。もちろん、それら遺物の作製時期に関しては、北区の大攪乱に^{あまた}数多の遺物が捨てられた時分を明らかにするうえで、すこぶる重要であるといえます。

このような検討の結果を勘案すると、北区の大攪乱から拾いあげられた、陶磁器などの多量の遺物については、その大半が清風館のものであった、と理解することができるのではないのでしょうか。すなわち、清風館の建物の解体・撤去などに伴って、そこで使用されていた、ないしは保管されていた物品のうち、不要となったものが北区の大攪乱に廃棄されるにいたったと推測いたします。

なお、こうした卑見をめぐって、注意を払わなければならないのが、住友史料館に所蔵されている、いわゆる「清風荘史料」のうちの1点であります。レジュメでは、【図2】として掲げているのですが、それは、「田中村耕地実測図」の一部であります。残念ながら、それには、作成された年月が書き入れられてはいないのですが、そこにわたくしがトレースしたものは、【史料3】であげた地番「四ノ三」に合致すると目されます。

したがって、リーフレットの6頁の図17と照らし合わせると、北区の大攪乱が【図2】の「荒地」に、南区が【図2】の「畑／六畝」に相当すると考えられます。つまるところ、【図2】の「荒地」は、清風館の不要品が大量に捨て去られた結果であったのではないのでしょうか。そうであるが故に、一時期、その場所は、畑として耕作することができなかったと思われます。よって、このような見解を前提にすると、【図2】の「田中村耕地実測図」は、明治時代の末に描かれたと推察されます。

ここで、話題を出土文字資料に移すと、2のところでも触れた、「京都府立療病院」とみえる円筒形の磁器が問題となります。はたして、京都府立療病院と清風館、いい換えると、徳大寺家の人々とのつながりがあったのか、こうした点に関して、吟味していかなければならないといえます。

そこで、【史料8】に目を向けていただきたいのですが、【史料8】は、前にもとりあげた『住友春翠』における記述であります。そこには、住友春翠と西園寺公望の父である徳大寺公純が病床に臥し、遂には帰らぬ人となったことが書き綴られている。

【史料8】を読みあげると、「明治十六年九月中流」、「中流」というのは、中旬のことです。「明治十六年九月中流より（徳大寺）公純は病に臥した」。そのような公純に対しては、「漢法医の大家福井貞憲の主に診るところであつたが、（十月）二十三日、京都府病院長半井澄が招かれ、半井は胸部の症状の憂慮すべきを告げた」とあります。それ以降においては、明治16年（1883）11月5日に、公純が鬼籍に入ったと述べられています。

みのがせないのは、傍線部分の「京都府病院長半井澄」であって、その下のところに書き記したように、この時、半井澄は、京都府医学校の校長であって、京都府立療病院の院長を兼任していました。したがって、ここに、徳大寺家と京都府立療病院との係わりをみてとることができます。

しかしながら、1のところでも指摘したように、徳大寺公純の死後、程なくして、同居していた住友春翠ら家族は、東京に移っています。その結果、清風館は、京都における徳大寺家の別邸となるにおよびました。よって、徳大寺家の人々と京都府立療病院とのつながりは、すっかり切れてしまったとも推測されます。けれども、清風館は、別邸になったとはいっても、徳大寺家の人々がそこに滞在する場合がしばしばあったことが、いくつかの史料からうかがわれます。したがって、そのような折に、病気に冒され、その結果、京都府立療病院の医師の診察・診療をうけることがあったとも考えられます。

残念ながら、上述の事柄に関する史料を、一切みつけ出すことはできておりません。しかるに、わたくしは、清風館に居住、ないしは逗留していた徳大寺家の人々が、診察・診療などを通じて、京都府立療病院と結びつきを有していたが故に、それに係わる磁器などが清風館にもたらされるにいたったのではないかと憶測しておきたいと思います。

ちなみに、念のため確認しておくとして、清風館の近くには、京都帝国大学医科大学附属医院、後の京都帝国大学医学部附属医院が位置していたのですが、京都帝国大学医科大学附属医院が設けられたのは、明治32年（1889）のことです。もしかすると、清風館の立地を前提にすれば、なぜ京都帝国大学の附属医院が関係してこないのか、こうした点について、疑問に思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、その理由は、まったく単純なものであります。

さて、わたくしの話の最後として、「府立医大」「京都府立医大附属医院」とみえる遺

物について、臆見を開陳しておきたいと思います。「府立医大」のものは、ちらしの裏側に写真を、「京都府立医大附属医院」のものは、リーフレットの7頁に図20として実測図と拓本を掲げてあります。南区の灰褐色土などから、「府立医大」とある磁器小皿2点、「京都府立医大附属医院」とあるガラス製の薬瓶3点が出土しているのですが、これらは、すべて展示してあります。それらに関しては、南区もまた久しく住友家が所有していたこと、かつ「^(註)□風荘」という墨書のある陶器片、それは、ちらしの表面やリーフレットの7頁に写真22としてあげてあるのですが、「^(註)□風荘」の遺物の出土が南区であるという点をふまえると、清風荘に係わり合う可能性が高いと考えられます。

「京都府立医大附属医院」、すなわち京都府立医科大学附属医院については、2のところで説明したように、大正13年（1924）10月以降の名称であります。いっぽう、「府立医大」、すなわち京都府立医科大学に関しては、レジュメをみていただきたいのですが、大正10年10月に、京都府立医科大学の設立が認可され、初代の校長が任命されるにいたっています。したがって、「京都府立医大附属医院」の遺物は、大正13年10月以降、「府立医大」の遺物は、大正10年10月以降に作られたことがうかがわれます。

ところで、西園寺公望であります。清風荘に滞在している際に、その診察などにあったのは、中西亀太郎であります。レジュメに目をやっていただきたいのですが、中西亀太郎は、京都帝国大学医学部教授などを務めた人物であります。つまりは、有力な政治家である西園寺公望の診察などには、権威ある帝国大学の教授があたったわけであります。よって、西園寺公望と京都府立医科大学関連の遺物との結びつきは、なかなか考えづらいものがあります。

しかしながら、そうであったとしても、公望が引き連れてきた女中や料理人、ならびに住友家で雇われていた清風荘の管理・事務員などが、京都府立医科大学附属医院などつながりを有していた可能性は否定できないのではないかと思います。要するに、西園寺公望以外の清風荘に係わる人々との関連を推測したいのですが、もとより、確証のあるものではありません。したがって、こうした点をめぐっては、後日の課題とさせていただきますと思います。

かくして、455地点から出土したたくさんの近代の遺物について、長々と考察を加えてきました。再びそれぞれをまとめるのは止めにして、一つだけ強調しておきたいのが、近代の遺跡・遺構、遺物の性格などについて明らかにするためには、考古学的な検討とともに、文献史料・出土文字資料からの分析が不可欠である、という点です。そうした事柄を確認して、わたくしの拙い話を終わらせていただきたいと思います。

※前記の話は、わたくしが執筆した『京都大学構内遺跡調査研究年報 2018年度』第I部第2章第5節の内容を、できるだけわかりやすく書き記したものです。ただし、それ以降における吟味・検討の結果も、少しばかり書き加えてあります。

京都大学総合博物館 2019年度特別展 文化財発掘VI—幕末・近代の出土文字資料—
関連講演会「田中関田町遺跡からみつかった近代の遺物について
—出土文字資料と文献史料にもとづく考察を中心に—」

笹川尚紀

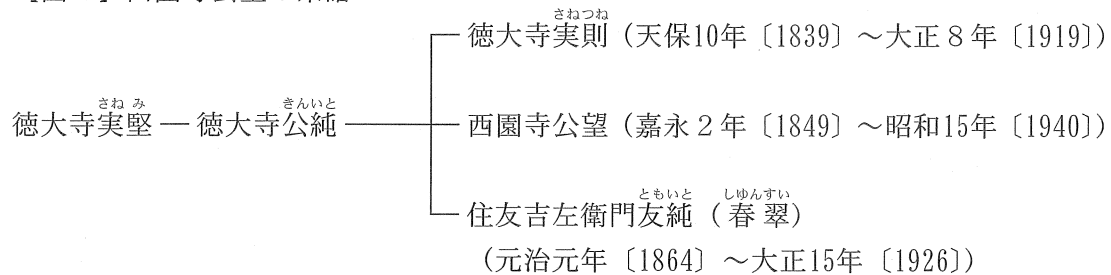
455地点の発掘調査の成果→『京都大学構内遺跡調査研究年報 2018年度』

北区：大攪乱

南区：表土・攪乱、灰褐色土（近世後期から近代の遺物包含層）

1. 清風荘をめぐって

【図1】西園寺公望の系譜



清風館→江戸時代後期に設けられた徳大寺家の別邸

明治40年（1907）8月、徳大寺実則から住友春翠に譲られる。

西園寺公望の京都における控邸にあてられることが決定

【史料1】『住友春翠』第7章（芳泉会、1975年再版、1955年初版）

公望は自らの好に依り、又旧清風館の面影を残すことに意を配つて、新館造営と庭園の改造を計り、住友家の手に依つて大正二年に之を竣功した。造庭は小川治兵衛、建築は八木甚兵衛が、春翠の命に依り、公望の意を受けて当つた。公望は旧名を保つて清風荘と名附けた。

【史料2】高橋箒庵『東都茶会記』第4輯 上巻

「陶庵侯閑居」〈大正5年11月22日〉

侯は徐に語り出で、是れは旧徳大寺家の下屋敷にて、自分の祖父が経営せし者なれども、旧建物のいたく破損しければ、四五年前遂に之を取払ひて、…

〔岸・杉田2011〕→清風荘の主屋に関しては、明治44年（1911）7月に、敷地に縄が張られるなどし、翌8月から工事が本格化して以降、大正元年（1912）の末には、ほぼ完成するにいたった。

【史料3】『京都地籍図』第参編 接続町村之部・『京都市及接続町村地籍図附録』第
参編 接続町村之部（大正元年〔1912〕10月31日発行）

「^{おたぎ}愛宕郡／田中村大字田中ノ内／字^(ママ)開田」 「四ノ三」
「字 地番 …地目 …地主姓名
^(四田)同 四ノ三 ^(畑)、 ^(住友吉左衛門)同 人」

【史料4】石碑

「寄贈 澤村志づ／土地一九七平方米」
「平成五年十二月」

2. 「京都府立療病院」と「京陶」

明治15年（1882）11月 京都療病院→京都府立療病院

明治36年（1903）6月 京都府立療病院→京都府立医学専門学校附属療病院

大正13年（1924）10月 京都府立医学専門学校附属療病院→京都府立医科大学附属医院

京都陶器（株）会社→明治20年（1887）5月に創立された陶磁器製造会社で、その工場は紀伊郡深草村^{ふくいな}福稲に設置される。

【史料5】「京都陶器会社株金分担見込書」（藤岡幸二編『京焼百年の歩み』）

一、金式拾万円

（中略）

発起人々名

田中源太郎 濱岡光哲 内貴甚三郎

（中略）

藤井孫兵衛 …

【史料6】「陶器会社に従事せる当時の思ひ出一丹羽圭介翁談一」（『田中源太郎翁伝』、
水石会代表 三浦豊二、1934年）

明治二十五年遂に会社の解散を見るの止むなきに至つたのである。

（中略）

右と同時に私も会社を退いたが、その後暫く五車楼書店主の藤井孫六氏が社長として
経営して見たが、これも長くは続かなかつた。…

菱屋 五車楼→御幸町通御池下ルの地において、明治時代の末ごろまで12代続いた書肆
であり、おのおのの主人は、藤井孫兵衛を名乗っていた。

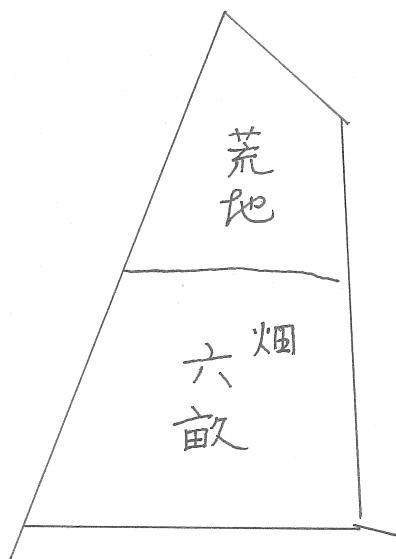
【史料7】明治36年（1903）3月25日付『京都日出新聞』（第5701号）

京都陶器会社の任意解散 同社は^(明治34年)一昨年以來業務休止中なるが、斯ては益々欠損を
重ぬるを以て、之が恢復の為昨^(明治35年)年末より事業開始の計画をなせしも、是亦意の如く
ならざれば、今回遂に任意解散することに決し、来月四日午後一時より同社内に於て

臨時株主総会を開き精算人を定めた上、財産の処分を為す由なるが、他に債権者もなきこととて、精算手続きの完了は速かなるべしと。而して資本金五万五千五百円の中約三万円の欠損あるが、未だ買受人等はなき由。

3. 大攪乱出土の近代遺物の性格

【図2】「田中村耕地実測図」（住友史料館所蔵）



【史料8】『住友春翠』第3章

明治十六年九月中浣より公純^{きんいと}は病に臥した。…漢法医の大家福井貞憲^{さだのり}の主^みに診るところであつたが、…（十月一笹川注）二十三日、京都府病院長半井澄^{なからい さやか}が招かれ、半井は胸部の症状の憂慮すべきを告げた。…遂に十一月五日の夜に入つて、公純は容体が^{あらたま}革り九時四十分に薨じた。…

半井澄→京都府医学校の校長、京都府立療病院の院長を兼任

大正10年（1921）10月 京都府立医科大学の設立が認可され、初代の校長が任命される。

中西亀太郎（明治元年〔1868〕～昭和17年〔1942〕）

京都帝国大学医科大学教授・京都帝国大学医科大学附属医院院長・京都帝国大学医学部教授などを務める。

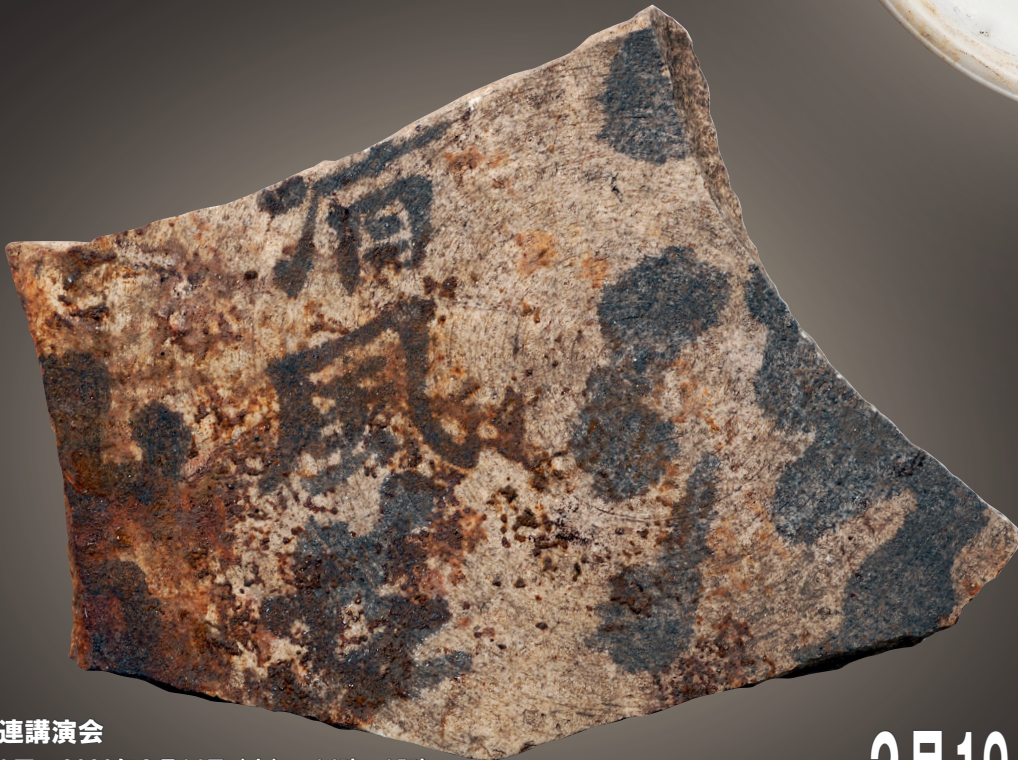
〔参考文献〕

伊藤之雄 2007年 『文春新書 609 元老西園寺公望 古希からの挑戦』、文藝春秋
岸泰子・杉田そらん 2011年 「史料からみた清風荘の建築」（『史料からみた清風荘の建築—建造物調査報告書一』、京都大学 名勝清風荘庭園整備活用委員会）
京都府立医科大学百年史 編纂委員会編 1974年 『京都府立医科大学百年史』、京都府立医科大学長 佐野豊発行



文化財発掘VI

— 幕末・近代の出土文字資料 —



関連講演会

- 第1回 2020年3月14日(土) 14時~15時**
 笹川尚紀(京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター)
 「田中関田町遺跡からみつかった近代の遺物について
 —出土文字資料と文献史料にもとづく考察を中心に—」
- 第2回 2020年3月28日(土) 14時~15時**
 伊藤淳史(京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター)
 「近・現代の考古学と京都大学構内遺跡」

※場所はいずれも総合博物館本館3階の講演室
 参加無料(ただし、博物館への入館料は必要)
 ※両日の13時~16時に、尊攘堂(京都大学本部構内/総合博物館南側)を公開
 します。京都大学構内から出土した遺物の展示をリニューアルしております
 ので、ぜひご覧ください(無料)。

2020年 2月19日(水)~4月19日(日)

9時30分—16時30分(入館は16時まで)

休館日 月曜日・火曜日(平日・祝日にかかわらず)
 観覧料 一般400円 高校生・大学生300円 小学生・中学生200円
 *20名以上の場合は団体観覧料が適用されます。
 *障害者手帳をお持ちの方とその付き添いの方1名、70歳以上の方、
 京都大学学生および教職員、京都府下の大学在籍の学生は無料
 (要証明証)

主催 京都大学総合博物館
 京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター

文化財発掘VI

一幕末・近代の出土文字資料

京都大学構内の地下には、たくさんの遺跡が残されています。それらから出土した遺構・遺物等を紹介する、シリーズ「文化財発掘」の6回目は、幕末・近代における出土文字資料を主題としています。

発掘調査の結果、同時期の文字を墨書・釉書き・印刻した土器や陶磁器・瓦などが、数多くみつかっています。この度は、幕末・近代の京都大学構内を特徴づける、土佐藩白川邸・第三高等学校・京都帝国大学・清風荘等に係わる資料を中心に、展示をおこないました。そしてまた、文献史料などを参考にすることで、それらの文字が意味するもの等について、検討を加えています。

以上のような出土文字資料などを通じて、それぞれの歴史を深く知っていただければ幸いです。あわせて、今回の展示を一つのきっかけにして、新しい時代の出土文字資料にも広く関心が向けられ、ひいては、その研究が進展することを大いに期待しております。

なお、この度の展示から、文化財総合研究センターの職務を昨年4月に継承した、大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センターが企画しています。



「中佐」の刻印銘瓦（北部構内）



「瀬 716（統制番号）」（吉田南構内）



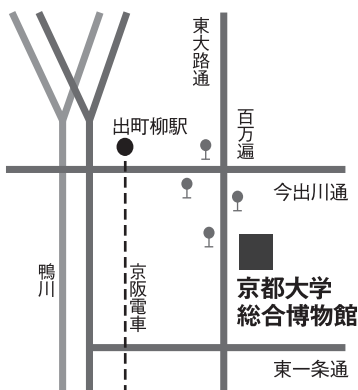
「医院」の円形意匠（病院構内）



「賄」「医院」の円形意匠（病院構内）



「府立医大」（田中関田町遺跡）



交通案内

●市バス

JR / 近鉄京都駅から 17・206 系統
 阪急京都河原町駅から 3・17・31・201 系統
 地下鉄烏丸線今出川駅から 201・203 系統
 地下鉄東西線東山駅から 31・201・206 系統
 「百万遍（ひやくまんべん）」下車徒歩約3分

●京阪電車

「出町柳（でまちやなぎ）」駅下車徒歩約 15 分

※駐車場がありませんので、公共交通機関をご利用ください。

京都大学総合博物館

〒606-8501 京都市左京区吉田本町
 TEL (075)753-3272
 FAX (075)753-3277
 info@inet.museum.kyoto-u.ac.jp
<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>

表面写真

「大学」の円形意匠（本部構内）
 「京都帝国大学寄宿舍」「美濃窯業」（吉田南構内）
 「^(福)風荘」（田中関田町遺跡）

文化財発掘 VI

— 幕末・近代の出土文字資料 —

京都大学構内における発掘調査の結果、古代以降の文字資料がたくさん出土しています。出土文字資料とは、土器や陶磁器・瓦等に、文字を墨書・釉書き・印刻したものなどにあたります。そのような出土文字資料のなかでも、今回の展示では、幕末・近代という、新しい時代のものをテーマにしています。

全国各地の遺跡からみつかった文字資料のうち、とりわけ注目されているのは、古代の木簡や墨書土器である、といっても過言ではありません。古代の文献史料は、現存するものが少なく、それゆえに、新たな史実をもたらす出土文字資料は、研究者の間で、たいへん重要視されています。

しかしながら、中世以降のものであっても、遺構や遺跡の性格を明らかにする、ひいては、地域の歴史を考えていくためには、けっして軽んじることができないといえます。

この度は、そうした点を念頭に置いたうえで、幕末・近代の京都大学構内を特徴づける、土佐藩白川邸・第三高等学校・京都帝国大学・清風荘などに係わる出土文字資料を中心にして、展示をおこないました。そしてまた、文献史料等を参照することで、それらの文字が意味するもの、それらの文字からくみとれる事実などについて、とかく考察をめぐらせています。

以上のような出土文字資料等を通じて、おのおのの歴史を深く理解していただければ幸いです。あわせて、今回の展示を一つのきっかけにして、新しい時代の出土文字資料にも広く関心が向けられ、ひいては、それに係わる研究が盛んになることを大いに期待しております。

なお、この度の展示から、文化財総合研究センターの職務を昨年4月に引き継いだ、大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター 京大文化遺産調査活用部門が企画しています。



「大学」の円形意匠（本部構内出土）

1. 土佐藩白川邸

北部構内には、江戸時代の最末から明治時代の初頭にかけて、土佐藩の屋敷、すなわち白川邸が所在していた。以下に、その沿革について、簡潔に述べる。

土佐藩は、幕府によって大坂湾の警衛を命じられたのをきっかけにして、文久元年（1861）4月ごろに、撰津の住吉、現在の大阪市住吉区東粉浜^{こはま}2丁目に陣屋を完成させた。その造営にあたっては、国元から木材・石材などを調達したことが、文献史料からおさえられる。

ところが、慶応2年（1866）9月に、先の任務が免じられた結果、同年の冬ごろに、住吉陣屋の建物を白川村の地所に移築するにいたった。こうして設置されたのが、白川邸である。

それは、中岡慎太郎を首領とする陸援隊の屯所などとして使われた後、明治3年（1870）2月5日付の太政官布告をふまえたうえで、同年の6月初旬から程なくして、とり壊されるにおよんだと考えられる。

北部構内からは、208地点をはじめとして、白川邸に用いられていた、刻印銘を有する瓦などが大量にみつまっている（図1）。そのような刻印銘の大半は、土佐の瓦屋の屋号ないしは商標に該当する。

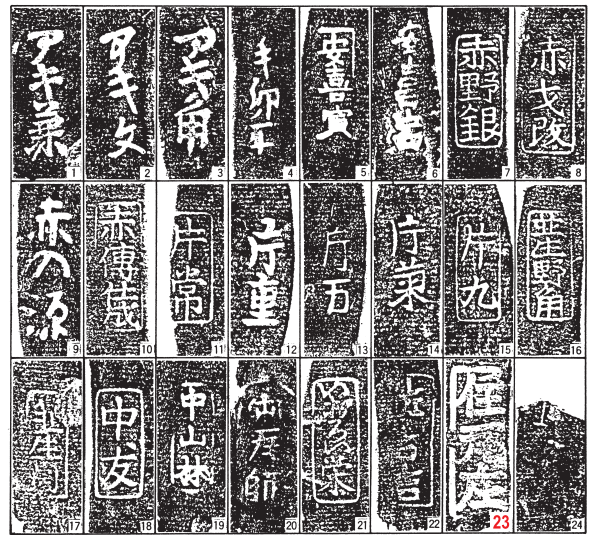
つまるところ、土佐で作られた数多くの瓦が住吉陣屋で使われ、その後、白川村の地所に運搬されたことが、それらの出土によって明らかになったといえる。

ただし、208地点の2点の「住瓦庄」（図1の23。なお、写真2を参照）、今回展示している109地点の「谷川丸市」（写真3）という刻印銘瓦に対しては、注意を払わなければならない。

なぜなら、前者は、「住吉の瓦屋の庄兵衛」を省いたもので、撰津の住吉において作られた瓦、後者は、大阪府泉南郡岬町多奈川^{たながわ}谷川の辺りで生産されていた、いわゆる谷川瓦にあたる目されるからである。

もとより、それらは、製作場所などを勘案すると、住吉陣屋ならびに白川邸の屋根瓦の一部であったと理解してよからう。

けれども、住吉陣屋の建設当初から、そのような瓦が用いられていたのかどうか、修繕・増築の際の購入といった点を含めて、吟味していくのが不可欠であるといえる。



1 208地点出土の刻印瓦銘



2 「住瓦庄」
病院構内436地点出土。白川邸の屋根瓦の1枚であった可能性が存する。



3 「谷川丸市」

2. 本部構内

本部構内の歴史を振り返ると、その嚆矢は、第三高等学校の移転に求められる。

大阪城の西に所在していた第三高等学校は、京都におけるいくつかの候補地のうち、本部構内の地に建設されることが決定し、明治22年(1889)9月には、開校式を迎えるにおよんだ。その後、明治27年6月に公布された高等学校令により、第三高等学校は、第三高等学校に改組され、同年9月に授業が開始されるにいたっている。

しかしながら、第三高等学校の敷地と建物などは、明治30年6月に創設された、日本で2番目の帝国大学である京都帝国大学に引き継がれることになった。

本部構内からの出土文字資料としては、277地点と296地点のものを出陳した。

前者の展示品のうち、10点の磁器染付碗に関しては、見込みに「大学」「大医」の円形意匠をもつものが7点と1点(写真4・5)、「総長」という文字をもつものが1点存する(写真6)。

くわえて、底部外面には、「文斎」「耕山製」「万珠堂製」「松好精製」「万珠」という製造元名、「物理」「機械」「本」「TS」という学科名などが記されている(写真7・8)。

なお、「大学」の円形意匠を有する陶器土瓶(1頁)の底部外面には、漢字2字の墨書が認められるけれども、墨が薄くなっている部分が多く、確定することができない。

いっぽう、後者については、十五年戦争に係わる遺物、すなわち統制番号と「隣組」の歌がみえるものを取りあげた。

統制番号とは、太平洋戦争期とその前後において、陶磁器に対して使用されたものであって、それぞれが公定価格品であることを示すために、各生産地の工業組合が決めて、個々の生産者に割り振られたとされる。

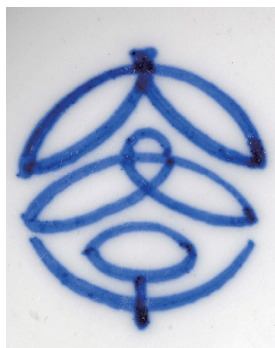
たとえば、「岐396」の場合、「岐」は、その統制番号を定めた岐阜県陶磁器工業組合連合会のことを指す(写真9)。

また、「隣組」の歌とは、芸術家の岡本太郎の父である岡本一平が作詞したもので、昭和15年(1940)6月に、はじめてラジオで流され、同年の10月には、そのレコードが発売されるにいたっている。

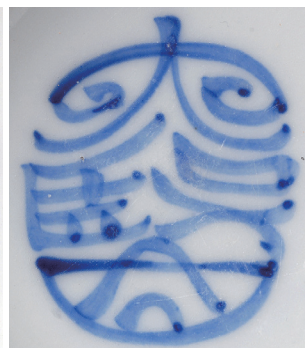
隣組は、昭和15年9月に制度化された、10戸

内外からなる隣保組織であって、同年10月に結成された、官製国民統制団体である大政翼賛会の末端組織に相当する。

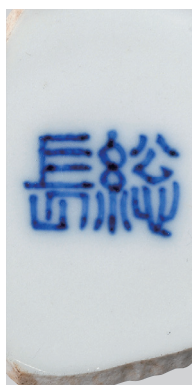
したがって、年月が一致するという点をふまえると、「隣組」の歌の売り出しと大政翼賛会の発足とは、密接な関連を有していたと考えられよう。



4 「大学」



5 「大医」



6 「総長」



7 「物理」



8 「機械」



9 「岐396」

3. 吉田南構内

吉田南構内には、もともと第三高等学校が所在していた。明治30年(1897)6月に、京都帝国大学が創立されると、第三高等学校は、本部構内の地を離れ、東一条通を隔てた南側の地に移転して、校舎を新たに設けるにいたった。

自由の校風で多彩な卒業生を輩出した第三高等学校は、昭和24年(1949)5月に、新制京都大学が発足すると、それと合わさって廃校となった。そして、吉田南構内には、後に教養部となる吉田分校が設置されるにおよんだ。

吉田南構内の261地点からは、口縁部外面に「第三高等学校」と書かれた磁器染付碗が出土している。くわえて、見込みに、長方形枠囲みで「大正四年十一月十日」、円形枠囲みで「大典(奉)祝」、高台すぐ上に、漢数字の「三」をなかに入れた桜花の刻印銘を有する軟質施釉陶器の皿がみつまっている(写真10)。

よく知られているように、大正4年(1915)11月10日に、大正天皇は、京都御所で即位儀礼を実施した。また、桜花一輪+三は、明治27年(1894)に制定された第三高等学校の徽章にあたる。

よって、これら事柄を勘案すると、この皿は、大正天皇の即位儀礼を祝うために、第三高等学校によって作られたものであったと判断されよう。

いっぽう、399地点からは、緑色の二重線をめぐらし、「京都帝国大学寄宿舍」と記された「美濃窯業製」の硬質磁器の皿や碗などがとりあげられている(写真11・12)。

これらに関しては、大正2年(1913)に、学生寄宿舍とともに、その食堂とまかない賄所が本部構内より移転・新築されていることから、それらで使用された食器であったと理解しえよう。

「美濃窯業」、すなわち美濃窯業株式会社は、大正7年8月に発足した、岐阜県瑞浪市みずなみに所在する会社である。当初は、煉瓦部のみであったものの、大正9年のはじめに、製陶部が新設されるにいたった。

製陶部は、社名・社章等のマークが個々に入った、特注品である集団給食用食器などを製造し、東濃地方における陶磁器の最大工場となった。

美濃窯業株式会社の昭和6年(1931)のカタログには、「硬質磁器」の「最近の主なる御得意先」として、「京都帝国大学医学部附属病院」とともに「京都帝国大学学生寄宿舍」が、同じく昭

和13年の食堂食器のカタログには、「主ナル納入先」として、「京都帝国大学」があげられており、注目される。

しかしながら、昭和18年6月の戦力増強企業整備要綱によって、同年10月には、その生産が中止され、製陶部は、閉鎖されるにおよんだ。

なお、1点の磁器湯呑みの体部外面には、「楽友会館」と書かれている。現存する楽友会館は、学生寄宿舍の南に位置し、大正14年(1925)に、京都帝国大学創立25周年記念事業の一つとして、同窓会館として建設されたものである。



10 「大正四年十一月十日」「大典(奉)祝」



11 「京都帝国大学寄宿舍」



12 「美濃窯業製」

4. 病院構内

病院構内に関しては、展示品とのつながりに絞って、説明を加える。

明治32年(1899)7月の医科大学の設置に伴って、その12月には、附属医院本館における診察が開始される。附属医院本館は、東構内の南部に位置し、その北側には、明治32年に第1・第2病舎、同34年に第3～第7病舎、同35年に第8病舎が、いずれも平屋で、かつ東西対称の形で建造されるにいった。

くわえて、西構内の北東隅では、大正5年(1916)に、^{まかだい}賄所と洗濯場が新しく築かれている。

病院構内の出土文字資料としては、366・384・436地点の附属医院に係わる遺物を出陳した。

まずは、366地点のものをとりあげると、なかでも留意すべきは、「京都陶器株式会社」と書かれた磁器製の漏斗である(写真13)。

京都陶器(株式)会社は、明治20年(1887)5月に、紀伊郡深草村^{ふかいね}福稲に設立された、陶磁器の製造をおこなった会社である。

当初は、国外への輸出に努めたけれども、業績の不振に陥った。そこで、国内向けの生産などで経営の挽回を図ったものの、功を奏しなかった。

明治36年3月25日付の『京都日出新聞』によると、京都陶器会社は、「一昨年以来業務休止中なる」こと、同年4月4日に「臨時株主総会を開き」「任意解散」することなどが記されている。

こうした事柄と附属医院の設置時期を考え合わせると、先の漏斗は、明治32・33年ごろに、注文・納入されたものであったのがうかがえる。

なお、1点の磁器碗の底部外面にみえる「陶器会社精製」(写真14)の「陶器会社」については、京都陶器(株式)会社に一致する蓋然性が高い。

つぎに、384地点のものに目を向けると、藍色・朱色の「医院」や「大学」の円形意匠をもつ皿・碗・重ね物等が、まとまってみつまっている。

藍色の「医院」の円形意匠のなかには、印判によらず、手書きのものが2点みうけられる。後者の底部外面には、「松好精製」「万殊堂製」とあって、製造元を知ることができる。

しかるに、前者の印判によるものには、それがいっさい記されておらず、したがって、そうした点をめぐっては、課題が残されているといえよう。

384地点は、先に触れた賄所があった辺りに位置し、このような事柄をふまえると、緑色の二重

線をめぐらす「美濃窯業製」のものとともに、そこから廃棄された食器である公算が大きい。

最後に、436地点のものは、井戸SE1からとりあげられている。漆喰で作られたそれは、附属医院で使われていたもので、そのなかから、「京都帝国大学薬局」と書かれた乳鉢(写真15)など、それに係わる多くの遺物がみつまっている。

陶製の湯たんぽには、「病^(意)□」「□^(病カ)三」という墨書・朱書があつて(写真16)、それらは、第1病舎・第3病舎のことを指す可能性が高い。

第1病舎は、昭和15年(1940)に、その一部が西構内に移築され、また、第3・第5・第7病舎は、昭和11年までに、第2・第4・第6・第8病舎は、昭和13年までに、とり壊されている。

よって、それらを含む大量の遺物は、昭和10年代前半に投棄されたと推量される。



13 「京都陶器株式会社」

14 「陶器会社精製」



15 「京都帝国大学薬局」



16 「病□」

5. 田中関田町遺跡

田中関田町遺跡^{せきでんちやう}のなかに位置する455地点は、京都大学女子寮の建て替えに伴って、発掘調査がおこなわれたところである。

機械力や人力といった掘り下げによって生じる、不要となった土の置き場所を確保するため、発掘調査は、図17の赤線から南側・北側の順に、2回に分けて実施された。前者を南区、後者を北区と称する。

北区の西半は、近代に広く掘削されていて（大攪乱と呼ぶ）、埋め戻された土のなかには、たくさんの陶磁器などが混じっていた（写真18）。

大攪乱から南区にかけては、今回展示した、大正元年（1912）10月31日発行の『京都地籍図』（京都大学工学部・大学院工学研究科吉田建築系図書室所蔵）などから、西に隣接する清風館・清風荘と同じく、明治時代末以来、久しく住友家が所有していたことが判明する。

まずは、清風荘をとりあげると、それは、江戸時代後期に設置された、徳大寺家の別邸である清風館を前身とする。

藤原氏北家閑院流^{かんいん}の徳大寺家は、摂関家に次ぐ家柄である清華家^{せいがけ}の一つにあたる。その当主であった実則^{さねつね}は、明治40年（1907）8月に、住友吉左衛門友純^{ともいと しゅんすい}（春翠）に清風館を譲渡した。それに伴って、西園寺公望^{きんもち}の京都における控邸とす

ることが決定される。西園寺公望は、その当時、内閣総理大臣を務める有力な政治家であった。

かような人物の別邸とされた理由に関しては、徳大寺実則・西園寺公望・住友春翠の3名が、徳大寺公純^{きんじゅん}の子で、兄弟であった、という点があげられる。つまりは、次男の公望は、清華家の一つである西園寺家、その弟である春翠は、財閥として成長する住友家の当主を継いだのであった。



17 455地点の平面図 縮尺1/700
一点鎖線内は京都大学女子寮の敷地



18 455地点の北区全景（表土・大攪乱など除去後 南西から）

住友家に譲られて以降、明治44年から、新館(清風荘)の建設がはじめられ、その主屋は、大正元年の末には、ほぼ完成するにいたった。

ここで、話題を近代の文字資料に移すと、北区の大攪乱ならびに南区からは、それが少なからずとりあげられている。出陳したものは、それらのうちの一部である。

そこで、大攪乱の「京都府立療病院」(写真19)と南区の「京都府立医大附属医院」(図20)について、説明をおこなうと、京都府立療病院は、明治15年(1882)11月に、京都療病院から変名したものである。

その後、上京区第十二組梶井町(現在のの上京区河原町通広小路上る梶井町)にあるそれは、明治36年6月に、京都府立医学校から京都府立医学専門学校へと改称されるに伴い、その附属施設、すなわち京都府立医学専門学校附属療病院となった。そして、大正13年(1924)10月には、京都府立医学専門学校附属療病院は、京都府立医科大学附属医院へと改名されるにおよんでいる。

したがって、以上のような推移をふまえると、「京都府立療病院」の磁器は、明治15年11月から明治36年6月の間に、「京都府立医大附属医院」のガラス製品は、大正13年10月以降に作られたことがうかがわれる。

さらに、大攪乱の「京陶」(写真21)に着目すると、それは、前述した京都陶器(株)会社を略したものである可能性が存する。

もし、そうした見方が正しいとすると、「京陶」の磁器は、明治33年以前にこしらえられたことが推測される。

先に触れたように、455地点のうち、北区の西半の大攪乱から南区にかけては、明治時代末以来、清風館・清風荘と同様、住友家が長らく所有していた。

このような点と上記した事柄を勘案するに、大攪乱からみつかった近代の遺物の多くは、清風館、南区のそれは、清風荘に係わるものであった、と解するのが一案として浮上することになる。

とりわけ後者に関しては、「^(清)□風荘」と墨書された陶器片がみつかっていて(写真22)、つまりは、そうした想定を補強するものと判断される。

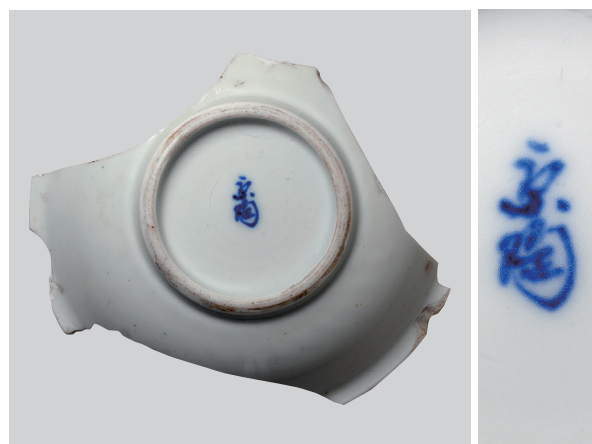
かかる見解が妥当か否かはともかく、455地点から、京都府立医科大学関連の遺物が多く出土している、という点をめぐっては、検討を深めていく必要がある。



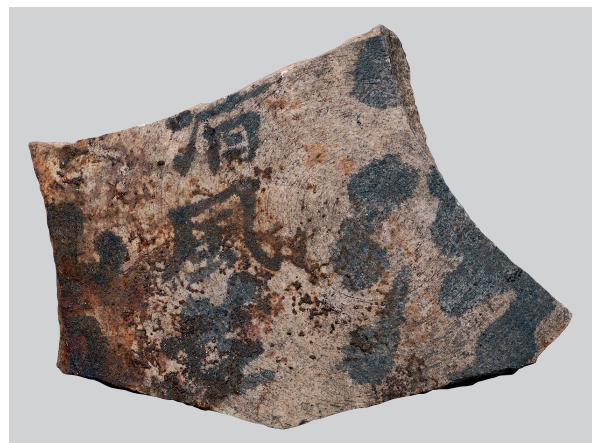
19 「京都府立療病院」



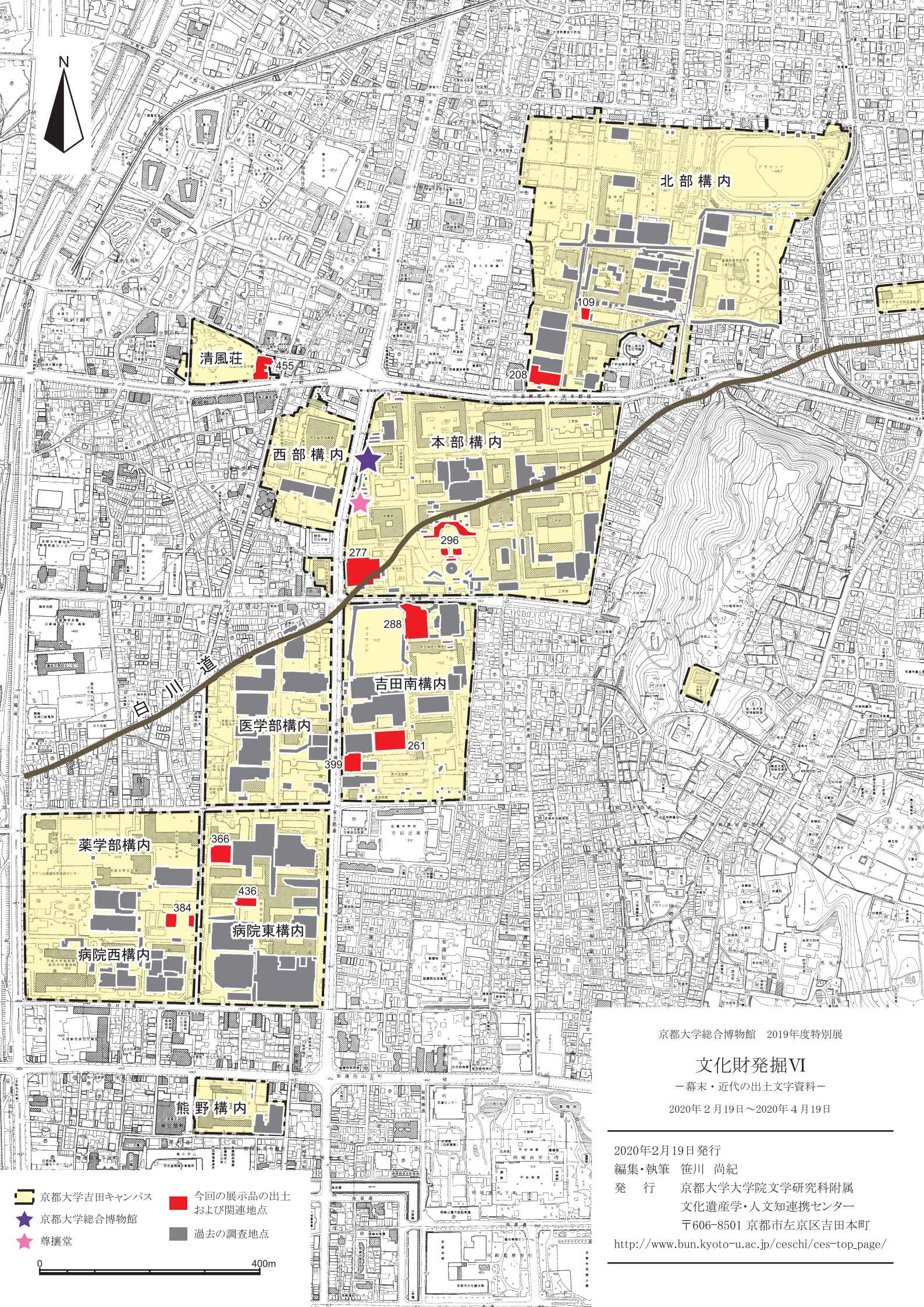
20 「京都府立医大附属医院」(ガラス製薬瓶)



21 「京陶」



22 「^(清)□風荘」



京都大学総合博物館 2019年度特別展

文化財発掘VI

—幕末・近代の出土文字資料—

2020年2月19日～2020年4月19日

2020年2月19日発行

編集・執筆 笹川 尚紀

発行 京都大学大学院文学研究科附属

文化遺産学・人文知連携センター

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/ces-top_page/

- 京都大学吉田キャンパス
- 今回の展示品の出土および関連地点
- 京都大学総合博物館
- 尊攘堂
- 過去の調査地点

0 400m